

書評

ジョナサン・M・メツル, アンナ・カークランド 編,
細澤 仁, 大塚紳一郎, 増尾徳行, 宮畑麻衣 共訳
『不健康は悪なのか 健康をモラル化する世界』
(みすず書房, 2015年)

松浦 広明*

世界保健機関 (WHO) の憲章において健康は、「身体的, 精神的ならびに社会的に完全に良好な状態をいうのであって, 単に病気や虚弱でないことをいうのではない」と定義される¹⁾。これは, 健康を単に「病気や虚弱でない状態」と消極的に定義するのではなく, 「身体的, 精神的ならびに社会的に完全に良好な状態」と定義することで, より包括的な視点から見た理想の状態としての健康を追求していく積極的な健康観の提唱と言える。

WHO憲章は, さらに「最高水準の(そのような)健康に恵まれることは, あらゆる人々にとっての基本的な人権の一つ」であり, 「その成否は, 個人と国家の全面的な協力が得られるにかかっている」としている。今日, 個人の健康は, ますます社会の問題となり, 各国政府はそれを保護する責任を負っていると解釈される。一方で, 個人もまたより多くを求められるようになり, 自らの生活習慣や置かれている社会経済的環境を「賢く」選択する事で, 病気を予防し, 積極的に自らの健康を増進していくことが求められている。

今日, われわれの社会では, そのような「賢い」選択をサポートするため, あらゆる生活習慣や製品に「健康」あるいは「健康的」のラベルが貼られている。例えば, 「タバコは健康に悪い」とか「母乳育児は健康に良い」というように。しかし, そこで使われている「健康」という言葉は本当に

健康改善や延命を意味しているのだろうか? もし違うのであれば, それはどのように違い, またその違いはどのように作り出されたものだろうか? 我々はそのような「違い」に対して騙されたことと異議を唱えることができるだろうか? 本書はそのような疑問に対して実に多くの事例とヒントを与えてくれる良書である。

本書は, 2010年にNYU Pressから出版された“Against Health: How Health Became the New Morality (健康に異議を唱える: どのようにして健康は新しいモラルとなったのか?)”の訳書である。“Against Health”というタイトルは2006年にミシガン大学で開かれた国際学会のタイトルと同じもので, 本学会での報告が本書が執筆されるきっかけとなった²⁾。本書は, 人々が自身の健康状態を改善し, 病苦から身を守ろうとすることの正当性を批判する本ではない。本書が批判するのは「健康」という言葉の背後に隠れた特定のイデオロギー的要請であり, その意味で「健康に異議を唱える」というタイトルは必ずしも本書の内容を適切に反映していると言い難い。一方で, 翻訳版のタイトルは原著タイトルと異なり「不健康は悪なのか」となっている。これは, 不健康が悪ではない場合に, われわれは本来, 善である健康に対しても異議を唱えることができるだろうという想定の下で採用されたタイトルと思われる。しか

* 松蔭大学 副学長

¹⁾ WHO (1946) Constitution of the World Health Organization, World Health Organization http://www.who.int/governance/eb/who_constitution_en.pdf (2016年9月16日最終確認)。

²⁾ 副題は“How Ideologies of Health and Healthcare Can Stand in the Way of Good Living.”から“How Health Became the New Morality”に変更されている。

しこのタイトルもまた本書の内容を適切に反映していると言いき難い。なぜなら、本書は「不健康（健康）は悪（善）なのか？」という疑問に対して一定の答えを出そうとする過度に野心的な啓蒙書でも、また、不健康（健康）が悪（善）と認定できる理論的条件を導こうとする哲学書でもないからだ。

本書に敢えて、その内容に即したタイトルを付けるならば、「どのような時、われわれは健康に異議を唱えられる可能性があるだろうか？」というところだろう。そのような問いに対し、本書では、さまざまな分野の研究者が、タバコ、肥満、母乳育児など、特定のコンテキストにおける事例を分析し、「健康」という概念の背後にあるイデオロギー的要請を明らかにしようとしている。そして、そのような「イデオロギー的要請」を、本来の意味の「健康」と切り離すことで、一見正しく、また時として絶対的価値観のように思える「健康」に対して異議を唱えようとするものである。編著者達の挑発的な物言いをそのまま拝借するならば、本書の目的は「健康を偽りの中立性の座から退位させること、そして現代の合衆国における政治的・社会的な生の複雑性の中へと沈下させること」である。なお、本書はアメリカ社会をターゲットに書かれているが、その多くは日本社会にも適用できる事例である。

本書は、編著者によるイントロダクション・結語と4部13章によって構成されている。各章ごとに異なるトピックが扱われ異なる執筆者が担当にあたる。訳者は、本書を論文集としているが、第7章の「(ときには) おっぱいの育児に意義を唱える」のように、学術論文への言及はあるものの引用が一切なく、論文の体裁で書かれていないものもある。

第1部「ところで、健康とは何だろうか？」では、健康の定義に関する3つの論考が収められている。第2章では、「煙草は崇高である」の著者で、長年、映画、舞台、小説など創作で使われるタバコの役割についての研究を重ねてきたコーネル大学でフ

ランス文学の教授職を務めるクラウンの論考が収められている。彼は「なぜ喫煙はそこまで貶められるような行為なのだろうか？」という疑問から出発し、現代社会は、幸福への別のアプローチ、すなわち快楽を中心とするアプローチを失っていると論じる。第3章では、シカゴ大学のアメリカ文学・文化研究者であるバーラントが肥満に焦点を当てる。彼女は、肥満を個人の問題として捕えるのではなく、人々の日常生活における疲弊が過食の根本にあり過食はストレス解消法としての一面を持っていると主張する。第4章では、カリフォルニア大学サンフランシスコ校の医療人類学者アダムスがグローバル・ヘルス・サイエンス創生記における政治的・社会的影響について論じ、薬学的・実験室科学とインターナショナルヘルス事業の統合についての批判を展開している。彼は、「科学的厳密さを通してのみ健康は達成される」というグローバル・ヘルス・サイエンスの傾向を批判し、科学的証拠がなければ介入それ自体が無効であるかのように思わせる手続き主義が引き起こした社会的弊害を説明している。

第2部「道徳から見た健康」では特定の市場における道徳的な誘因に関する分析を展開している。第5章ではペンシルバニア大学の人種と法の専門家であるロバーツが人種に特化した薬品・遺伝子選別技術により、公共の福祉に対する責任を国から家族や市場といった私的な領域に移行させる過程が進行していることを批判し人種に基づく医療を批判している。第6章では、マンハッタン・メリーマウント大学のコミュニケーションの専門家であるルベスコが肥満の引き起こす害悪の報告には一貫性がないと主張し科学的なエビデンスを否定した上で、肥満の蔓延は道徳パニックの一例であり³⁾、そこにはアイデンティティ、主体性、権利をめぐる文化的要素が潜んでいると指摘する。その上で彼女は「あらゆる体系での健康」というパラダイムを提案している。第7章では、女性学の専門家であるテキサスA&M大学のウォルフが母乳による育児の是非に関して医学的・道徳的論争

³⁾ この主張は、第2章のバーラントの日常生活における疲弊が過食の原因とする説と真っ向から対立する。

を再検討している。彼女は、母乳育児の医学的便益の証拠は曖昧であり、そのコストは過小評価されていると指摘し、全米授乳自覚キャンペーン(NBAC)のような試みは女性を脅して母乳育児をさせようとする政府の非倫理的試みと批判する。

第3部「健康と疾患を造り出すこと」では、需要を創出するために新たな疾患を作り出したいくつかの事例が紹介されている。第8章では、ミネソタ大学の哲学者であるエリオットが、製薬会社により誘導されたマーケティング、宣伝キャンペーン、そして学術的権威との結託が、特定の疾患に対する精神医学的信念を形成する様子を批判している。彼は従来の「利害の対立」を規制する方法だけでは、製薬産業を取り巻く倫理的問題を全て解決する事は出来ないと主張する。第9章では、ノースウェスタン大学の英文学者レーンが、米国の精神疾患の診断マニュアルの草稿を研究し、精神科医の不注意と集団志向が新たな精神疾患カテゴリーの誕生を促し、1968年「精神疾患の診断・統計マニュアル(DSM)」では、わずか180種の精神疾患のカテゴリーが上げられていたものが、1994年のDSM-IVでは350種以上となり、今や国民の半分が少なくともそのうちの1つを患っている状態になったと論じている。第10章では、イリノイ大学シカゴ校のディヴィスが、強迫性障害を例にとり、複雑な医学上の現象を単純化して説明してしまうことは、最終的に健康に反することであると一例をあげて主張している。第11章ではシカゴ大学の人類学者マスコが、原子力革命を例として、健康と国家安全保障との関係について論じている。病気や不安の欠如としての健康は、個人個人の犠牲の上に成りたつ政府による計算と置き換えられてしまったというのは、原子爆弾だけではなく現在のリスク規制全般に対しての批判でもある。

第4部「健康になった後の快樂と苦痛」では、肉体的・精神的健康を獲得した上でのさらに細分化された健康のカテゴリーを扱っている。第12章では、ウィスコンシン大学マディソン校の女性学者であるキムが、セックスに関する健康情報や解釈は、普遍的な性的欲望にあまりにも信を置きすぎ

していると批判し、性的欲求の欠如を欠乏や治療すべき障害ではなく、アイデンティティの問題として捉えるよう推奨している。第13章では、スタンフォード大学の人類学者ジェインが、第11章でマスコが取り上げた核の脅威を減じるための戦略に擬え、癌の脅威に対し、主要な脅威は癌ではなく個人の癌に対する不適切な対応と置き換えられてしまったことを批判している。第14章では、ミシガン大学の文学文化批評の専門家であるシーバースが「苦痛に対する恐怖」こそ、最も普及力と欺瞞に満ちたあり方で障害者の迫害を正当化する方法の一つであると主張している。

最後に、結語として、編著者の1人であるカークランドが、すべての章を総括し、本書の意義を再び説明している。

以上、本書のタイトルとその内容を簡単に紹介した。各章に含まれている豊富な事例の数々は、健康に携わる研究者や市場関係者にとって一読に値するものばかりである。本書は、人類学者、哲学者、文学者、法学者、女性学者など、さまざまな分野の研究者達によって書かれた極めて学際的な著書である。各章ごとに異なるトピックを異なる執筆者があたっているため、各章の論説の間に矛盾もあり、また論文のスタイルも執筆者ごとにまちまちであるが、本書を通した執筆者たちの主張は極めてシンプルなものである。すなわち、「健康」という言葉の裏にある偽られた中立性を白日の下にさらすこと、また、科学的な装いを下に経済的利益を貪る製薬会社など「健康」という言葉を牛耳るプレーヤたちの振る舞いに対し疑いの目を向けさせること、このような本書の目的は、執筆者たちがあげた数多くの事例を通して十分に達成されたといっていいただろう。

われわれは、執筆者たちの指摘を真摯に受け入れる必要がある。第3部で論じられたように、いくつかの疾患において「健康」という言葉は、製薬産業やアカデミアによって人為的に、そして時として、実際の健康改善とは無関係に作り出されたものであるかもしれないからだ。そしてそれは、企業の利益追求の結果としてだけでなく、研究者同士の集団意識によって生まれるものである

かもしれないからだ。このような問題提起は、医療市場における資源配分の問題を考える上で重要なエビデンスを提供している公衆衛生学者や医療経済学者にとって非常に重要な指摘である。

一方で、われわれは、医療市場における資源配分の専門家話にも耳を傾ける必要がある。本書の執筆メンバーは、非常に学際的であるが、医療分野の資源配分の専門家である公衆衛生学者、医療経済学者、医療倫理学者などの研究者を含んでいない。そのため、これらの分野の専門家にとって必ずしも同意できない点、また既にある概念の焼きなおしではないかと思われる点もある。例えば、クラインの「快楽か健康か」という話は、分析的政治哲学における主観的功利主義と客観的功利主義の話の焼きなおしのように思えるし、マスコの主張する「病気や不安の欠如としての健康は、個人々の犠牲の上に成り立つ政府による計算と置き換えられてしまった」という指摘は、リスク規制における統計的生命価値（Value of a Statistical Life）の使用に対する批判の文脈と類似している。これらの批判は、公衆衛生学、医療経済学、医療倫理学において、より蓄積のある問題であり、これらの分野の研究者の書物と平行して読むことで、両者が共有する問題点はより明確になるかもしれない。

また、本書の中心にあるのは、健康を人々に押し付けるいわゆる「ヘルシズム」への批判であるが、人々が自身の健康状態を改善し病苦から身を守ろうとすることに対して批判しない旨が繰り返し強調されている。この姿勢には共感できるものの、執筆者たちのうち幾人かは、健康改善のエビデンスとして疫学的研究、特にランダム化比較試験によるエビデンスを神聖視し過ぎていて、結果

として、それが過剰なまでの敬意と反応に繋がっているように思える。第4章で、アダムスは「証拠に基づく科学」やその手続き主義を批判した。彼は、「科学的厳密さを通してのみ健康は達成される」という考え方を批判したが、それとは逆に、極度に厳密さを求めるがあまりに信頼に値する科学研究など存在しないと結論付けたのがルベスコやウォルフの章ではないかと思える。すべての研究が同じ方向を向くなどありえないし、まだランダム化比較試験でなければ、すべての研究結果が直ちに交絡因子によって歪められて、結果が無効になる訳でもないのである。このような面でも、医療分野における資源配分の専門家からのフィードバックは、本書の内容をさらに発展させるために必要になるだろう。

本書の執筆者たちが主張するように「健康」の裏に隠されたイデオロギー的要請は確かに存在し、われわれはそれを日常的に少なからず認識している。そしてそれは、ビジネスや政治と結びつき、現代社会において、無視できないほどの影響力と新たな社会的問題を作り出しているのである。その問題は、医療分野における資源配分の専門家たる、公衆衛生学者、医療経済学者、医療倫理学者にとっても無視できない問題であり、また長らく放置されてきた問題のように思える。そのような問題提起が人文科学・社会科学の研究者たちからもたらされたことを非常に嬉しく思うと共に、そのような研究が将来、医療における資源配分の専門家の仕事と結びつき、公衆衛生学、医療経済学、医療倫理学のメインストリームへと統合されていくことを強く望む。

(まつうら・ひろあき)